





源氏物語玉乃小櫛三の巻

改免正ししる年立付圖



桐壺帝
御在位

	き	了	流	
一 年	源氏 為生れ あり	桐壺 更衣と き免き 終あり	桐壺 更衣 しせあり	一 の ま 立 坊 後小 朱雀院 と す は 是 也
二 年				
三 年				
四 年				
五 年				
六 年				
七 年			源氏 為生れ あり	
八 年				

○玉乃小櫛三

一〇

源氏君
正三位

み毛

十月
朱雀院
行幸

紫 若

三月源氏
紫上十景を
藤壺女に
十月朱雀院
行幸

花 摘 末

春

朱雀院
行幸

十八

顔夕

十月

夏

蝉空

夏

七

源氏君
任中

木 帚

夏

源氏君
任中
将

十

が

源氏君
元服

玉づり
源氏君
今年
生れ
夕
秋
小

九景

十景

十一

十二

三十

四十

五十

六十

〇五
三

〇二

原氏君
内大臣

冷泉院
御在位

生 夏

原氏君八構を叙す
四月原氏君未指花
夏

み 冬

十月原氏君八構を叙す
二月次原院元後侍りし
朱雀院侍讓位、今上东宮に侍り
原氏君任内大臣 三月明石御
六條、山鳥取加と侍り

十九

合 春

春 芳女入内梅つと侍り 後秋中末より侍り
三月

一

風 秋

秋 明石院君之御侍りし

一

為 冬

為 雪女院加と侍りし身侍り
秋

二

親 冬

九月

二

原氏君
左大臣

玉 冬

玉 玉著上京
秋玉著上京御侍

在 冬

及夕芳君元後
梅壘女御為中宮 秋中末
原氏君任左大臣
秋夕芳君任侍從
八月六條院に侍り
十月

三 四 五

○玉著上京

百〇

源氏
正三位

み毛

十月
朱雀院
行幸

紫 若

三月源氏
紫上十第をう
藤壺女御孫姪
十月朱雀院行幸

花 摘 末

春

朱雀院行幸
源氏

十八

顔夕

十月

夏 夏

蝉空

七

○玉竹之十三

○二

源氏
任中

木 帚

夏

源氏
任中
中将

十

が

源氏
元服

玉竹
今春
生れ
夕顔
小

九第

十第

十一

十二

三十

四十

五十

六十

原氏
宰相

原氏
大將

朱雀院
在位

ちのり

次泉院御誕生
七月原氏任宰相
帝御讓位のゆゑに
秋

十九

花宴

春
相重、帝の御讓位朱雀院の文禪
あまのり、今年ふまへ

二十

一九

あひ

正月
伊代改_り、原氏大將
前坊の娘_を女_をたり
相重、女三_を女院_をたり
夕_を、生_を、八月葵、上_をせ_を

廿二

原氏
大將

花菱

夏

賢本

九月坊の_を伊勢_を下_をたり
相重、帝_をか_をせ_を
朝_を、_を、_を
夜_を、_を
夜_を、_を
夏

廿四

廿五

須磨

三月
三月原氏須磨、浦_を下_をたり

廿六

蓮

原氏
大將

明石

三月
二條、_を改_をたり
今上_を、_を
八月原氏_を、_を
八月原氏_を、_を

廿八

廿七

○廿七

○三

源氏君
内大臣

冷泉院
御在位

生 夏

源氏君
仲八溝
四月源氏
君未指花
三月
秋

み 在 片 く 志

十月源氏君八溝を引ひ
二月次東院山元被侍り
朱雀院御讓位 今上東宮に立り
源氏君任内大臣 三月明石姫君
六條山鳥羽に遷り
秋

九
十三

合 松 風

三月
春
芳梅入内梅下
秋
明石姫君之御侍り

一

源氏君
右大臣

為 雲 親 朝

為
為重女院加へて世孫に事せ
九月
秋

二

玉

玉
秋玉善長御殿
玉善長上京
玉
玉善長御殿

在 聖 め

及夕善長元被
梅壘女御為中宮 秋中
源氏君任右大臣
秋夕善長任侍從
八月三條院に遷り
十月

四

三

五

○玉善長一三

目

原氏准
太上天皇

梅枝

春

三月 原氏君此九岁始より 乃准を上天皇

夕暮君中細云小なりゆか 十月

十二月 女之末十三四岁始より 乃

原氏君四十四岁 夕暮君位大将

三月 亦末涉誕生

三月

年月よりより 乃

卅九

四十

四十一

四十二

四十三

今上
陽立位

美君
誕生

若

冷泉院即位より十八年 涉讓位

立坊 夕暮君位大将 乃大将

朱雀院涉年五十 女之末此年廿二

紫上此七岁 乃末幼マ宮誕生 十二月

正月 美君誕生

原氏君四十八岁始より 乃

二月 乃末三岁始より 乃

秋

四十四

四十五

四十六

四十七

四十八

四十九

○五十五三

○六

善君
侍從
中将

五

加 へ 進

善君十四歳時
侍從
官八位侍從

此是於間亦原氏君如く進給也

不 亦

善君十四歳時
侍從
秋任右中將

善君
十四歳
十五
十六

〇五十五三

〇七

雲

幻

法 治

霧 夕

虫 鈴

冬 春

秋 春

冬 秋 秋 夏

紫上加く進給也

五十二

五十一

五十

善三
三位宰相

げ

身をゆるす

善三宰相中納言

が

橋 姫

ぬ み や

善三三位宰相おろし

正月

善三宰相おろし

同善三宰相おろし

善三宰相おろし

善三宰相おろし

十七

十八

十九

二十

廿一

廿二

善三
中納言

は

夕善三位右大臣
紅梅善三位右大臣
善三位中納言

紅 梅

白美奈
善三位中納言
善三位中納言

夕善三位右大臣
善三位中納言のうら

推 本

夏

二月
秋善三位中納言

総 角

秋白美奈
善三位中納言
善三位中納言

早 蕨

正月
二月善三位中納言
白美奈の二條院

二月善三位右大臣
四月

宿 本

善三
右大臣

〇五五三三

〇八

い老漢が心におきて、まじき宗長へ下らさるは、さう後いつても、
 べきがごとく、此物語も、げをり、まづ、え終とを、おきて、まじき年三々、
 帝本より、けい、きり、相壺を、ハ、序文、まじき、い、まじき、い、い、い、
 いちれ、さ、お、り。

帝本巻

源氏、君十七、第、れ、ま、り、さ、り、此、時、官、ハ、中、将、也、但、一、中、将、お、任、ま、
 ら、ま、り、さ、り、ハ、相、つ、が、と、此、を、ま、り、お、ま、り、い、い、い、い、い、い、
 ナ、二、と、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、
 け、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、

ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、
 ら、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、
 ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、

元禄巻 夕顔巻

帝、本、を、の、日、年、お、て、源、氏、君、十、七、第、也、ナ、二、と、い、い、い、い、
 い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、
 ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、

より紫巻

日、君、十、八、第、也、り。

末摘花巻

日君十八の春より十九乃正月まで。或人曰。夕親上のくせこれ
一ハ。去年の秋もふげきのろいもふ思へも程あふり。夕親
乃嘉。その月ゆきと。おがし。おれど。つり。秋より。明年も。ま
のり。毎年。ふき。ハハ。昔。さ。後。ま。胡。蝶。を。ふ。玉。着。思。ハ。
去年も。ま。お。は。保。氏。君。は。ふ。ら。つ。つ。ふ。ま。の。又。の。年。は。春
の。保。氏。君。の。初。お。が。く。年。へ。お。む。つ。ま。ま。と。思。し。昔。は。さ。ふ。を。さ。
の。ま。り。つ。つ。ハ。今。年。は。又。乃。初。つ。年。が。終。と。思。し。保。氏。君。を
と。秋。より。又。の。年。は。春。ま。だ。の。こ。い。ハ。さ。ら。と。ま。る。と。思。し。

お葉お葉

日君十八の十月より十九の秋まで。或人曰。お葉も未始花も

此花と。ま。め。は。同。年。お。ま。ハ。何。お。より。て。ま。ま。ら。ふ。昔。朱。雀。院。は
幸。は。り。お。葉。は。未。又。未。始。お。も。ま。ま。と。思。し。げ。き。の。娘。お。ま。ま。と。思。し。
え。り。り。こ。い。お。は。同。年。お。ま。と。思。し。又。お。葉。お。葉。壺。女。は。つ。ま。り。姓
お。ま。ま。と。思。し。此。花。は。未。乃。年。は。二。月。お。葉。お。り。又。お。葉。上。乃。祖。母
尼。君。ハ。お。葉。お。は。九。月。お。ま。と。思。し。此。花。お。三。箇。月。お。葉。上。除
服。乃。つ。り。り。こ。い。お。は。と。思。し。

花宴

日君二十の春より。

つれづれの事

日君二十より。は。三。の。正。月。まで。同。花。宴。と。此。花。と。の。あ。ふ。一。年。へ

同五廿五第 柳を於末と同日及五月於すこ。

須磨を

同五廿六第 於三月より廿七第の三月までなり。

明石を

同五廿七第 於三月より廿八の終まで。

みまつらへを

同五廿八第 於三月より廿九の終まで。

道生を

此をハカケル常陸の地を於三月まで。於三月より廿九の終まで。又のより廿九より三十の終まで。

同五廿九第 於三月より三十の終まで。又のより三十より三十一の終まで。又のより三十一より三十二の終まで。又のより三十二より三十三の終まで。又のより三十三より三十四の終まで。又のより三十四より三十五の終まで。又のより三十五より三十六の終まで。又のより三十六より三十七の終まで。又のより三十七より三十八の終まで。又のより三十八より三十九の終まで。又のより三十九より四十の終まで。又のより四十より四十一の終まで。又のより四十一より四十二の終まで。又のより四十二より四十三の終まで。又のより四十三より四十四の終まで。又のより四十四より四十五の終まで。又のより四十五より四十六の終まで。又のより四十六より四十七の終まで。又のより四十七より四十八の終まで。又のより四十八より四十九の終まで。又のより四十九より五十の終まで。又のより五十より五十一の終まで。又のより五十一より五十二の終まで。又のより五十二より五十三の終まで。又のより五十三より五十四の終まで。又のより五十四より五十五の終まで。又のより五十五より五十六の終まで。又のより五十六より五十七の終まで。又のより五十七より五十八の終まで。又のより五十八より五十九の終まで。又のより五十九より六十の終まで。又のより六十より六十一の終まで。又のより六十一より六十二の終まで。又のより六十二より六十三の終まで。又のより六十三より六十四の終まで。又のより六十四より六十五の終まで。又のより六十五より六十六の終まで。又のより六十六より六十七の終まで。又のより六十七より六十八の終まで。又のより六十八より六十九の終まで。又のより六十九より七十の終まで。又のより七十より七十一の終まで。又のより七十一より七十二の終まで。又のより七十二より七十三の終まで。又のより七十三より七十四の終まで。又のより七十四より七十五の終まで。又のより七十五より七十六の終まで。又のより七十六より七十七の終まで。又のより七十七より七十八の終まで。又のより七十八より七十九の終まで。又のより七十九より八十の終まで。又のより八十より八十一の終まで。又のより八十一より八十二の終まで。又のより八十二より八十三の終まで。又のより八十三より八十四の終まで。又のより八十四より八十五の終まで。又のより八十五より八十六の終まで。又のより八十六より八十七の終まで。又のより八十七より八十八の終まで。又のより八十八より八十九の終まで。又のより八十九より九十の終まで。又のより九十より九十一の終まで。又のより九十一より九十二の終まで。又のより九十二より九十三の終まで。又のより九十三より九十四の終まで。又のより九十四より九十五の終まで。又のより九十五より九十六の終まで。又のより九十六より九十七の終まで。又のより九十七より九十八の終まで。又のより九十八より九十九の終まで。又のより九十九より百の終まで。

関を

同五三十第 於三月より三十一の終まで。

繪を

同五三十一第 於三月より三十二の終まで。

あしハ何ふよりして知事さふ。若し條江島所をみまうぐの是の業
乃秋うらまへるふ。此を姑らぐをふ。あそあそ入内のもよみ。ち
此を浅みをつぐ。姑明年は去とせむ。母君の服のうちねまへ入内
あふべきふけり。又母君の髪をみまうぐ。姑末の年。生れあつた。此
をと同年姑松風をふ。保氏君姑相づ。むす姑子かよひふも。姑
ふふる。波とけり。ハ。三。年。に。ま。る。は。つ。く。し。じ。に。あ。り。ま。を。ま。る。べ。し。

松風巻

鎌倉巻の同年あそ。同君世一の秋也。

若雲巻

松風と同年姑をより。その又のう。同君世二の秋也。

朝顔巻

若雲を姑末乃同年あそ。同君世二の九月より。冬まであり。

をとめ巻

同君世二の秋也。友のう。り。ま。る。と。世。あ。乃。十。月。ま。で。し。

あつづり巻

此をハ。う。り。先。ハ。玉。鬘。君。世。あ。お。て。筑。業。へ。下。り。給。ひ。一。る。も。う。り。也。
あ。さ。り。け。え。も。ち。タ。親。を。お。を。と。う。一。ま。れ。あ。つ。り。一。る。う。れ。を。世。あ。の
め。ち。若。業。を。お。け。り。と。り。そ。と。より。筑。業。よ。て。年。次。く。さ。の。給。ひ。し。
と。と。ち。ら。づ。り。お。ね。り。あ。ま。う。お。と。け。り。ハ。保。氏。君。世。あ。お。を。と。め。巻。
の。甲。姑。年。あ。わ。り。け。り。は。是。の。年。ま。と。と。と。より。ま。る。べ。し。ま。る。その。ゆ。し。

下は何れと云へしと云はれタ善しと云ふハ其^分なりといひ一次の
 事也三月と云ふと云ハ一甲の時しかしてその日事也三月日ご
 ろはく一版おぎ出で京のかり給ひその日秘傳伝きてた進ふ也
 ぐりうひあひ十月お云條院よりうり位あひてその年事善乃
 りまをいへりこは源氏君五甲をとりめは其の末と同年は
 善し秘傳伝抄の説と此は其末の年をとりめは其乃末は明年
 といへし其年を源氏君五甲をとりそハ甲源氏君は年希本を
 を十とくして云くおがごへきてそとめは其末をいへり其を
 の末は其世といはるこは此巻其末をとりめは其乃明年と云
 承らみしきむがごとくして源氏君は^い齡も老く一年といひあつこ

此は其末は其をとりめは其乃末と同年は其の終りといひその
 ようハ下あつこといひ一と又一説よりハをとめは其末と云
 是は其末と同年といへ源氏君の齡をとりめは其末をいへり秘傳抄の説
 のまをいへ此は其末をとりめは其世をとりめは其末は其の
 乙と云ふといひはるなりといふ何れを一年といひて其は其
 ち葉をいへり甲は其末をいへり合せたり此説をとりめは其末と此は其乃
 末と同年といひはるなりといひて其は其^分なりといひて其は其
 あより一秘傳伝源氏君のうをいへり秘傳伝抄の説乃びつくり入る
 世は其なりと云はれ其乃其の文は一と云ふ一年と云ふは其の年
 の數を合せしむといひて其は其^分なりといひて其は其一年と

まゝとみづくと心よやくげちまき先づも源氏物語うへ一と
らまゝしてあまをねて四半半に念げらるやむとえびり
説くまゝなりとせど秋の夕ねどいふか一とせとて一年とせ
あゝしつふまゝ何れもそはねをまねをねるあふ妻くつら
だしそとくか縁あひとせらハ帯本を減す六半といつら
なぐぬるあし源氏物語年ハ上おもいつとせく。藤末紫をまてハ
いづつとせそいふとねりてハ帯本はさうけふうとていづつ
もちとせわゝる半小定むべきとせねとバナ七半とせまじしね定む
るまじいづとせもいづつとせねりかの一説と此そ何とせらば
て信じてものしとせ此をの末をねらる處女をねる末と同年

かうとせの徒どもハ加の一説おも太とていふ今ならんといふ條
おつとせ一とせつとせもまゝ夕紫をふとせと一誕生ねりといふ
けきね何ふたづりといふハとせのまね申ね年おつとせ源末
のちりハそのつらと年とあそつとせ一年へとせと後のとてハ
とせバ信抄の説もいひてあも。一此巻ふち近が御殿信よりつら
六條院よりありとせと信の文より。信門をまいつとより。信
おひろぐといふてまかまの車あはく信りあをねるてま
もまづおきとらねる。まねうてねると有とせ此院造てね
てまづねまて。先づとせまゝとせ此院ををとめねの末より
末をへとハ月おとせとねりてとせねり。信ふ信抄の説のい

（五）ねとせ一三

〇十六

ハタチ二十のちもまごじつちなるほどきくとつる取。詔抄の院をハ十九年
 の時多進バウ好つて院をとりむづし未を同年呂呂のとき十八年あつた
 ときハ此の院の好つてさるふや。善おわくつ物院の傍ハ此の院ハ必しとま
 すくこの年好つてもとくちやうにいつくときハ院の院をさる
 源氏君く中將ととさうら好つたどくちとつてもさる源
 氏君十九の詔抄の年をハ十八の又玉善を三條が御ふはく好
 ちくちとさるにいつくも十八の好つたのときハ此の院の
 夕善を好つたにいつくも十八の好つた十二月の好つたは太やうふたふ
 ちくちいつくしんかちくち好つたまや。

細善光 胡蝶光 螢光 螢光 螢光 螢光 螢光 螢光 螢光 螢光 螢光 螢光

野分光

此の光ハ源氏君ハ此の光ハ正月と八月まで月次り光り
 して詔抄の院をさる本光よりそと好つたまで一年づつかひま
 てをとり好つた未此の光ハ好つたは光ハ光と此の光ハ光と
 光と光より好つた光ハ光と光と光と光と光と光と光と光と光と
 光と光と光と光と光と光と光と光と光と光と光と光と光と光と

行幸卷

上の光の同年。同君此乃十二月と此七の二月まで。

藤原光

みゆき光乃末乃同年。同君此七好つた。

吉本桂光

藤をがまよと曰く原氏を廿七帖をより廿八の巻までし物成
加の一説よハとを廿六廿七とて又末の秋の文はくハ秋の
おとつを一年とて廿八第廿九までとて廿九とて廿九と
づつはを乃そはふ辨へておとつとて廿九とて廿九と
身はおとつとて廿九とて廿九とて廿九とて廿九と
ものおとつとて廿九とて廿九とて廿九とて廿九と
かて次の年へうつつとて廿九とて廿九とて廿九と
て廿九とて廿九とて廿九とて廿九とて廿九と
をバクとて廿九とて廿九とて廿九とて廿九と

づつとて廿九とて廿九とて廿九とて廿九と
へ此の巻の上おまを廿九とて廿九とて廿九と
の巻のつとて廿九とて廿九とて廿九と
まにーはは上おまを廿九とて廿九とて廿九と
やとつとて廿九とて廿九とて廿九と
いづとて廿九とて廿九とて廿九と
りハわとて廿九と

梅枝を 養末紫を

原氏を廿九巻あり梅枝を廿九三月はるるまで養のうとて
日月はるるがうとて廿九十月まで

の末代一年おもしろくおよりては帝即位の年より源氏為四十
ら乃そ一せいでハ十九年好く即位の明年よりかぎて十八年と
いつめ合をうり今定むる年を即位の明年よりかぎて十八年と
いへる帝五在位の年決定むる即位の明年を始とすも
のり好くも又即位の年よりかぎていつめ合をうり
天の下より一をうりこの時より好くおよりていつめ合
泰三の延喜五年合せて八年好く即位九年といふも
位のりより好くおよりていつめ合をうり
むりより好くおよりていつめ合をうり
の書ふをまよとていつめ合をうり

かゞ上よりして上の若葉下若葉といふや何のようぞ
や答もろくは書に巻をうり某上某下といふや
二つおより上下といふや好くおよりていつめ合をうり
あして二つの若葉好くおよりていつめ合をうり
上下といふや下よりかぎていつめ合をうり
好くおよりていつめ合をうり
の候より好くおよりていつめ合をうり
或はがづより好くおよりていつめ合をうり
を今又およりていつめ合をうり

おとうのあしむ。

柏本を

源氏を四十八の酉日より秋までし。是は申す所なり。五十八は
十よりまじりし。由よりいふとつと。是は今年生れあり。

横笛巻

源氏を四十九より秋までなり。

鈴虫巻 夕暮巻

同じ五十五番あり。鈴虫は、八月十日で。夕暮は、同じ八月よ
り。是までなり。

佛法巻

同じ五十一より秋までし。

まがろーり巻

同じ五十二の巻より。年終巻までし。是は五番あり。

雲隠巻

此巻名のよみて何あり。まがろり法家あり。そより。源氏
君。此巻はあひだおかしき。終つり。年終巻。是は、初巻あり。五
番あり。白巻あり。十は、終り。そより。まがろり。是は、六番
あり。十三まで。八年は、巻あり。ゆり。そより。源氏。は、の、かしき。あり
し。その、つと。つと。あり。

白宮巻

小秋葉君中御をふかり給つるよりその時を断トシと云ふ事
 の始し終りふと云ふ事と云ふ説を得し事と細流乃年
 三橋横をふ一年はふがひある事此中加の事は終り
 辨ふべし。さて終り此お梅お梅の娘君と云ふ事。白鳥と
 ふがひ終り此お梅お梅の娘君と云ふ事。白鳥と
 事と或説あり。竹川をたれたの傳しと云ふハむ事によ
 しと云ふ事むがと云ふ此をハむが事たれた乃娘君と云ふ傳
 と云ふ事もべし。竹川をたれたと云ふ事。お梅お梅の娘君と云ふ事
 と云ふ事。此をお梅お梅の娘君と云ふ事。お梅お梅の娘君と云ふ事
 うりてと云ふ事。お梅お梅の娘君と云ふ事。お梅お梅の娘君と云ふ事

らふ此人より何づかぬ事多し。但し竹川をたれた事
 終りてと云ふ事。竹川をたれた事。お梅お梅の娘君と云ふ事
 事。お梅お梅の娘君と云ふ事。お梅お梅の娘君と云ふ事

紅梅巻

此をハ。お梅お梅の娘君と云ふ事。お梅お梅の娘君と云ふ事
 事。お梅お梅の娘君と云ふ事。お梅お梅の娘君と云ふ事
 事。お梅お梅の娘君と云ふ事。お梅お梅の娘君と云ふ事
 事。お梅お梅の娘君と云ふ事。お梅お梅の娘君と云ふ事
 事。お梅お梅の娘君と云ふ事。お梅お梅の娘君と云ふ事
 事。お梅お梅の娘君と云ふ事。お梅お梅の娘君と云ふ事

を竹川の上流^{ツイ}で或は竹川を中流^{ツイ}と仰ぐは
なごもみちるふり。その山ハ夕暮^{ツイ}を大谷^{ツイ}中流^{ツイ}
おぼし給へハ日時^{ツイ}して竹川を始^{ツイ}り
左大谷といひ。源中流^{ツイ}と仰ぐ。但し夕暮^{ツイ}を大谷^{ツイ}
右大谷といひ。源中流^{ツイ}と仰ぐ。但し夕暮^{ツイ}を大谷^{ツイ}
長^{ツイ}く編^{ツイ}りけむ。右と仰ぐ。又竹川を大谷^{ツイ}
中流^{ツイ}にあり給へ。源^{ツイ}を大谷^{ツイ}にあり給へ。源^{ツイ}
へ通^{ツイ}り。夕暮^{ツイ}を大谷^{ツイ}にあり給へ。源^{ツイ}
秋^{ツイ}に夕暮^{ツイ}の字^{ツイ}へ通^{ツイ}り。源^{ツイ}を大谷^{ツイ}
こころ減^{ツイ}む。此卷ハ竹川の後^{ツイ}と仰ぐ。その中間^{ツイ}

又竹川の上^{ツイ}り流^{ツイ}づま^{ツイ}き^{ツイ}と仰ぐ。そとく此二卷
の流^{ツイ}ハかく明^{ツイ}くふ^{ツイ}して疑^{ツイ}ひ^{ツイ}ま^{ツイ}き^{ツイ}る^{ツイ}。源^{ツイ}を大谷^{ツイ}
編^{ツイ}り。源^{ツイ}を大谷^{ツイ}にあり給へ。源^{ツイ}を大谷^{ツイ}
大谷^{ツイ}。竹川を大谷^{ツイ}にあり給へ。源^{ツイ}を大谷^{ツイ}
ま^{ツイ}で大谷^{ツイ}と仰ぐ。源^{ツイ}を大谷^{ツイ}にあり給へ。源^{ツイ}
あり。源^{ツイ}を大谷^{ツイ}にあり給へ。源^{ツイ}を大谷^{ツイ}
ときハ此^{ツイ}。源^{ツイ}を大谷^{ツイ}にあり給へ。源^{ツイ}を大谷^{ツイ}
ら^{ツイ}。源^{ツイ}を大谷^{ツイ}にあり給へ。源^{ツイ}を大谷^{ツイ}
なり。源^{ツイ}を大谷^{ツイ}にあり給へ。源^{ツイ}を大谷^{ツイ}
きて後^{ツイ}と仰ぐ。此^{ツイ}。源^{ツイ}を大谷^{ツイ}にあり給へ。源^{ツイ}を大谷^{ツイ}

言申おたせり。あはれより書^キかして。但たはれり。ハ。竹川を
んし。と。い。書きて。た。い。書かして。る。ま。ふ。未。ま。で。た。細。ま。ら。ま
あ。し。実。を。梅。花。乃。を。此。贈。善。ま。し。了。海。を。名。大。名。お。な。り。給
つ。明。年。は。ま。さ。し。物。を。此。是。の。と。形。は。未。明。宿。本。を。本。を。本。を。本
い。ま。せ。り。ち。や。此。人。を。バ。名。大。名。い。ち。い。て。梅。本。大。名。と。の。と
し。り。も。ち。細。ま。ら。ま。海。も。て。此。を。竹。川。の。中。乃。と。せ。む。の。お
宿。本。本。を。海。も。竹。川。乃。中。乃。と。ま。ま。き。お。や。大。く。他。官。お。任。ド
て。後。も。お。や。ま。た。の。友。を。い。お。こ。い。上。お。い。つ。が。お。く。お。ま。や。同。
宿。本。本。を。梅。本。大。名。と。い。ち。い。ま。ご。大。名。を。お。た。せ。り。や。どの
の。を。い。つ。し。又。本。を。本。を。い。つ。し。ま。名。は。ま。は。書。お。あ。り。人。り。て。

た。た。た。お。な。り。給。つ。し。海。も。ら。び。し。つ。約。し。ま。れ。を。こ。れ。ら。
此。是。の。係。お。し。い。が。か。く。ま。ら。い。ち。ま。さ。し。し。此。人。宿。本。本。を。本。
ら。か。し。こ。ら。ら。ら。皆。梅。本。大。名。と。い。ち。申。お。宿。本。本。を。本。の。お。と。い。梅
本。大。名。細。ま。中。細。ま。大。名。海。も。ら。ら。ら。ハ。お。た。事。海。い。つ。る
お。ま。ら。ら。又。紫。式。部。の。あ。り。人。ま。し。お。大。名。お。な。り。給。つ。ま。ま。ら。で
し。り。ま。ら。い。が。か。く。べ。い。飯。の。取。ま。さ。か。く。し。い。ま。げ。も。ま。ら。を
ら。ま。ら。い。け。一。ま。ら。海。も。ら。い。ま。ら。べ。ま。や。ら。お。し。ま。ら。バ。此。梅。本。大
名。ハ。別。人。こ。し。つ。説。小。つ。説。ま。が。あ。べ。く。と。あ。ら。び。お。梅。本
大。名。は。こ。れ。を。ま。や。ま。し。或。説。お。お。梅。本。ハ。お。梅。本。大。名。の。傳。こ。し
い。つ。も。ら。ら。ら。ぬ。し。け。を。ハ。此。人。の。名。を。ら。ら。ら。傳。と。い。つ。し。

ちるをくじし下ふ宇治山の河原梨林系小出て冷泉院へありて
 久松宮の所々減語に申さる所より此是れ年をば立べきし此時意
 長寧お申せし所也其年の時をべし其れと此君十九年小して
 三位宰お小なりて其年中終もくねと終つどと白鳥を小して其
 明年其年其正月終りまでかの是白鳥小して其れにまはし此是格小
 次り其意をいりて宇治系小あり終りて其れは同年終りて終りて
 しがてその下終りて心よせつりゆつり終りて三年ばかりふ
 なりぬとまて秋の末つりていといと其れに意長の宇治小まわり
 そとあしりて三年終りて其二年の秋とまていとまて終りてありて
 其年終り十月終りまでいといと終りて此是れは意長其年より

其二年よりままでし此れを細流をど流あり十九年より二十一
 年までとせしこといふ一年よりそのゆゑをまげらぐめと十
 九年と定まりて其れは意長を宰相中將といふ宰お小なり
 終つて十九年の時をいりてし此れと白鳥を小して宰お
 おはれ終りていといと其れを格小して其れは白鳥よりいふ
 ちとちいりて小され宰お申せしはととよのて終りて十九
 年と定まべきよとと終りて其れは意長をいりて今其年よりいといと
 月よりいととと終りて其れは意長をいりて白鳥を小して其れは正
 定むべきこといふ終りていといと終りて十九年とまべきい

とせしむ。葵は元保氏正三早女正月よりまでして、次乃柳
花もその日ト年らりちる例あどきと思ふなり。

推本卷 宇治二

加ふるは元正三早女二月より始まりて、至秋申酒を小伝じ給ふ
外川花は末にあたり、至て年らりて、古田の交まで、ゆゑ小伝
抄の事立ち、橋原を小一、直女し、いゝわゝあふげをきと、正三
とせしむ。終り至信橋を小いゝるまで、次く一年つゞ遠くし。

つぎまたの元 宇治三

推本は末乃同年、同元正四女八月より、その年終りまでし。

早蕨元 宇治四

同元正五早女は、未なり。

宿本元 宇治五

此元ハ今上女ニ、その元ハ、酒出さき、ゆゑあふ、先女不どハ、
ふ前つゝ、その元ハ、そは、十早女にあり、終り、つゝハ、推本の
末、徳角と同年、つゝりて、至、交、あ、母女、ゆゑ、せ、あ、ひ、その年、ハ、
と、より、至、て、次、の、年、ハ、早蕨、を、小、つゝ、り、至、て、女、ニ、ま、侍、あ、入、
服、を、つ、つ、り、つゝ、ハ、交、あ、ひ、こ、と、よ、ま、お、蕨、の、次、へ、は、ぐ、く、し、お、あ、る、
け、あ、り、ま、で、ハ、女、ニ、ま、入、入、を、の、と、書、原、を、此、所、より、し、て、宇、治、
の、推、本、は、し、せ、終、り、し、と、又、申、元、は、酒、出、二、條、院、の、う、へ、つ、つ、な、
ど、み、ま、つ、げ、ま、き、お、蕨、を、ま、り、つゝ、り、は、ぐ、く、ま、り、る、ま、あ、し、ま、り、その

為雲女院を為言をふかるとせ給ひし時、廿七年に於て
是は原氏をふかすのこのことし、相つがの巻をふかすあり給ふ
いづれ給ふか、と尋ねし、原氏に於て七年より十一まであり給ふ
所は、此後於て十三年までのほどあり給ふべし、若葉をふかす侍従に
廿三、若葉をふかす侍従を生まり給ふ、廿四の頃、柳巻をふかす
とあり給ふ、廿五、廿六、廿七、廿八、廿九、三十年にあり給ふ。

秋好中宮ハ、柳巻をふかす、廿七、廿八、廿九、三十年にあり給ふ。
のうへへ、とて、相葉を、原氏を、十三年にあり給ふ、廿七、廿八、廿九、
みをつらふ、廿九、三十年にあり給ふ、とて、廿九、三十年にあり給ふ、
を給ふ、廿九、三十年にあり給ふ、とて、廿九、三十年にあり給ふ、

一、廿二、廿三、廿四、廿五、廿六、廿七、廿八、廿九、三十年にあり給ふ、
つゝ、給ふ。

明石中宮ハ、みをつらふ、廿七、廿八、廿九、三十年にあり給ふ、
廿九、三十年にあり給ふ、
上、若葉を、一、廿九、三十年にあり給ふ、
ふ、中宮に、
の、
あ、
は、

しむとあぢきしむ。又まづいふ所は、
とせせと、かひておがしと、さういふと、
もほごね交法身おし、おまうしに、
おまごい、幼くおんせし、さういふ、
三以上、聴^ス婚^ラ嫁^ラと、つりて、さう、
年十五、聴^ス婚^ラ既^ニ定^ス夫^ト婦^ト理^レ當^リ有^リ子^トと、
らへし、おまごい、さういふ、

白^ク無^ク終^ルつ、おまごい、下^ニ、
白^ク無^ク終^ルつ、おまごい、下^ニ、
あつ、終^ルつ、おまごい、下^ニ、

赤^ク雀^ノ池^ノの女^ニ、官^ニを、上^ニ、
先^ノの身^も、いふ、次の、
おまごい、二^ノの、
あつ、さういふ、
此^ノも、おまごい、
ふらり。

今^ノ上^ノの女^ニ、
六^ノ條、
あつ、おまごい、

つたり。此文年記違へるとして疑ひしを説き、その今年世系終るに
十六まで前坊よりあり終ひしハ、相壺を源氏忠九早終る事ありあ
らりて、朱雀院立坊ありて、六年お終るに、前坊を、そやく、喜美を
辞し終ひて、後いづれを坊を辞し終ひて、後おありあつた、といふ
説も、何れとて、はてさて、又、消息所とハ、中一づらに、やといひり、今考ゆ
るに、源氏減生をあり終ひて、後の院おあり終つた、とて、女侍とハ、
まて、前坊を、院より、准へらとて、いふこと、いふこと、は、此は、消息所も、前坊
を、おを、辞し終ひて、後おあり終つた、とて、いふこと、いふこと、は、
消息所、中一づらに、不意終る、といふこと、右の文乃上お、父お、終る

きりお終る、とて、いふこと、いふこと、は、
て、といふこと、いふこと、は、
て、後の、いふこと、いふこと、は、
が、いふこと、いふこと、は、
七、いふこと、いふこと、は、
ま、いふこと、いふこと、は、
夕、いふこと、いふこと、は、
十二、いふこと、いふこと、は、
十六、いふこと、いふこと、は、
有べし、いふこと、いふこと、は、

薰大將も松本をよせられしごとく。自らはなほなほ。十六日。未
し。十九日。未始より。海舟。陸攻の巻を。十七日。河へ。入り。その年
白鳥も。十八日。未始。ゆき。さ。う。ね。あ。の。巻。ふ。い。ま。か。の。巻。志。志。と。お
ね。ど。ほ。ど。あ。し。 白鳥も。ほ。ど。ね。き。を。い。ふ。 い。ま。二。つ。三。つ。ま。は。う。ま。は。ら。え。ふ。や。ま。こ
し。ゆ。び。ま。さ。ね。る。ま。し。き。ま。う。い。ま。い。つ。ハ。歌。 三。ハ。ヒ ぐ。つ。り。自。ら
も。ま。ま。ふ。り。一。つ。あ。う。ま。の。ね。い。り。て。ま。ま。ま。ま。二。つ。三。つ。の。あ。う。ま。は
ご。い。な。い。い。ふ。ご。や。

柏本。心。通。つ。巻。ハ。柏本。を。よ。か。ら。さ。さ。め。る。彼。巻。り。一。夕。巻。起。り。五
つ。つ。つ。の。あ。み。ね。わ。て。ん。と。と。と。二。之。巻。あ。べ。い。ゆ。じ。ハ。あ。り。あ
ま。は。年。も。ハ。も。ま。は。り。一。に。ま。ま。ね。ね。つ。り。し。

河。あ。ひ。の。上。と。源。氏。君。ふ。つ。つ。む。か。り。た。ふ。の。と。と。お。家。督。を。よ。か。ら
と。と。ハ。柏。壺。を。源。氏。君。に。元。彼。の。時。を。い。ふ。い。ふ。い。ふ。あ。り。た。つ。と。十
二。の。う。ね。あ。べ。い。ゆ。じ。を。よ。か。ら。さ。さ。め。る。ハ。あ。ま。は。り。あ。い。へ。家
督。を。ま。ま。一。と。せ。し。む。が。い。あ。り。ゆ。あ。し。

紫。上。も。ま。紫。ふ。十。む。か。り。と。と。い。お。家。督。を。よ。か。ら。さ。さ。め。る。正。月。の。初。ふ。十。か。あ
ま。り。ね。あ。う。い。ゆ。紫。を。よ。か。ら。さ。さ。め。る。源。氏。も。い。ゆ。じ。を。よ。か。ら。さ。さ。め。る。十。日。に。あ。ま。は。り。し。お。家。督
を。よ。か。ら。さ。さ。め。る。ハ。あ。ま。は。り。あ。い。へ。家。督。を。よ。か。ら。さ。さ。め。る。下。あ。ま。は。り。し。お。家。督
の。末。に。年。正。七。と。わ。る。ハ。遠。つ。り。後。の。元。り。よ。ら。と。な。る。その。う。い。は
は。す。早。あ。つ。つ。り。て。三。日。は。し。む。が。い。あ。り。今。定。ま。る。年。三。と。あ。ま。は
り。初。九。日。あ。つ。つ。り。て。二。年。乃。遠。い。し。ら。ま。あ。う。り。て。は。く。く。と。あ。あ。

ぬと七と、文を好む形や、近う読む。中ハ、廿九を廿七と写し、後
出さず、つらう、さう、今、侍り、さう、力、ほく、好本、みま、廿七
し、とも、く、やう、好む、ハ、今、好、人、さう、ハ、心、をつ、ま、さ、う、考、へ、合
きて、かく、べき、は、む、う、人、と、ち、ら、う、あ、て、か、の、意、志、と、自、言、ま、の、よ、ハ
む、乃、も、が、ひ、乃、も、が、ひ、さ、て、ら、ま、し、業、式、知、ぬ、と、ち、や、ま、さ、う、あ、と、
つ、ま、べ、く、つ、ま、さ、か、ら、う、つ、ひ、か、あ、ま、て、業、式、知、ぬ、と、ま、ま、さ、と、さ、る、は、
あ、ひ、ご、う、あ、ご、有、き、家、。

宇治宮好む思ハ、推本好む、好む、年、小、廿六と、つ、ま、バ、下、あ、業、式、
冷泉院の、後、讓、位、の、年、小、廿六、あ、り、ま、し、意、志、と、二、つ、の、の、の、み
ま、し、つ、ま、ま、た、の、を、ふ、う、せ、好、む、ハ、廿、六、の、の、し、。

同、多、好、中、思、ハ、推、本、を、好、む、の、の、小、廿、三、と、つ、ま、バ、極、事、を、意、志、の
と、同、年、小、廿、三、と、好、む、の、て、總、角、を、小、廿、三、と、あ、り、ま、し、意、志、と、
な、る、ハ、廿、四、の、の、の、り、。

玉、つ、つ、好、む、と、夕、親、を、小、廿、三、と、生、徒、を、つ、ま、う、と、り、源
氏、志、の、十、六、と、あ、り、時、ハ、つ、ま、わ、り、ま、し、玉、盤、を、小、廿、三、と、あ、り、ま、し、
取、ち、ま、し、と、あ、り、好、む、と、好、む、と、好、む、と、好、む、と、好、む、と、好、む、と、好、む、と、
が、あ、り、ま、し、六、條、院、を、つ、ま、り、任、ま、さ、う、と、の、の、し、志、本、極、事、を、つ、ま、
あ、て、む、げ、ら、る、好、む、と、好、む、と、好、む、と、好、む、と、好、む、と、好、む、と、好、む、と、
次、泉、院、を、好、む、と、好、む、と、好、む、と、好、む、と、好、む、と、好、む、と、好、む、と、
夕、親、を、好、む、と、好、む、と、好、む、と、好、む、と、好、む、と、好、む、と、好、む、と、

よく夕暮を此末りるしうハ遠くがぶくし。中一夕暮を乃
年ハ生れあひても。宿本のねむの年ハ正ニ早ふつとせバし但し
ゆふを、是ハ此末りるしうハ加のたはれ男女のしあしあを
つとへあげて、まべくナ二人おをさるうし。ねむハ此末りるしうハ生れぬ
しうも、末まてうきて、まべくつとふも、まべくしうも、此末りの海
ましちハ系圖ふ、ねむ二人の外ハ、種多くやれを、かひて、まべく
つとふしうも、しうも、かひて、まべく。

浮舟、是ハ宿本のねむの年ハ、ちむくしうと、つとバ、幻をの決ハ
年、生れらしうも、ちむくしう、中、是りハ、五つむくしう、^{オット}か、浮舟
是ハ正ニ、よむを、此末りるしうハ、正ニ、むくしう、此、年、形り。

